2016.03 / VOL.20

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA ニューズレター

2014年、これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「(社福)滋賀県社会福祉事業団」は、「(社福)オープンスペースれがーと」とひとつになり、「(社福)グロー」となりました。これからもよろしくお願いします。

展覧会レポート　アール・ブリュット☆アート☆日本3

Topic of NO-MA　アール・ブリュット国際フォーラム2016

ABColumn　アール・ブリュットを巡るコラム VOL.10

あのひとの近江八幡スタイル

地域インタビュー　地域に愛される青果店のご夫婦

京六 川村 嘉男 さん・志奈子 さん

展覧会レポート
Exhibition Report

編：横井悠（本展担当学芸員）

展覧会会場④旧吉田邸

舞台となったのは、滋賀県近江八幡の旧市街にある5会場。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAを中心に、その界隈にある旧商家や町屋、郵便局舎として使われていた歴史的建造物をお借りし、展覧会の会場として活用した。

展覧会では、障害者施設の現場や、病院、自宅などで生み出された計23名による力強い作品を紹介した。NO-MAでは、「グギング芸術家の家」（オーストリア）と、メンタルケア美術館（スウェーデン）から8名のアール・ブリュット作品を、界隈の4つの会場では、15名の日本の作品を展示した。それらの作品は、日常の所作や、暮らしの中から生み出される表現であり、美術館やギャラリーなど既存の文化施設で展示することを想定していない場合がほとんどだ。日常の産物である作品と、人の気配漂う町屋などの会場は、「生活感」という共通点から互いに魅力を引き出し合い、来場者に豊かな鑑賞をもたらした。

また、展覧会を通して出会ったボランティアスタッフの方々には、各所でそれぞれの役割を担っていただいた。スタッフは、地域の高齢者から作品の愛好家まで、世代や立場も様々。解錠・施錠、見回り、受付といった運営のサポートもさることながら、積極的に来場者と関わろうとする姿が多く見受けられ、そのことが展覧会全体の活気にもつながった。「作品に愛着が湧き、その面白さを多くの人に伝えたい気持ちが芽生えた」「受付をしているうちに会場が自宅のように感じられ、お客さんを家に招き入れるように交流するのがどんどん楽しくなった」。こうしたスタッフの積極性は、「作品」「鑑賞者」「ボランティアスタッフ」の関係を対等なものにし、優しい対話の場を形づくった。また、事前研修や会場でじっくり鑑賞したからこそ分かる作品の魅力を、惜しみなく来場者に紹介していただき、さらには会期中に開催されたトークイベントにおいても、アール・ブリュットの語り手として、十分すぎる役割を担っていただいた。来場者からは「展示方法が素晴らしかった」「深い、とらえようのないような大きなエネルギーを感じた」といった声があがった。多くの新たな支援をいただき、そこに集う人々すべてが充実した時間を共有するような場所として、展覧会が成長していく過程を目の当たりにできたことは、このうえない喜びだ。

NO-MA2階
メンタルケア美術館の作品を展示

アール・ブリュット☆アート☆日本3
2016年2月20日(土)～3月21日(月・振休)

【出展者】オズワルド・チルトナー、オーガスト・ワラ、ヨハン・ガーバー、ヨハン・ハウザー、エルサ・グリューネヴァルド、カイ・フランクリン、ハーマン、ペール・ヤルマール、五十嵐勝美、石野敬祐、泉巌、岩崎司、小幡正雄、小西節雄、鮏万里絵、鈴村勇貴、曽祇一晃、橋脇健一、林田嶺一、藤岡祐機、松尾吉人、村田清司、山際正己

助成：独立行政法人 福祉医療機構社会福祉振興助成事業
後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

ノマ Topic of NO-MA トピ
アール・ブリュット国際フォーラム2016

文：藁戸さゆみ（事務局担当）

2016年2月5日から3日間、「障害者の文化芸術活動の今を知る」をテーマに第1回目のアール・ブリュット国際フォーラムを滋賀・大津で開催した。天気に恵まれた本フォーラムは、琵琶湖を臨む大津プリンスホテルを会場に、今年で20回目を迎える「アメニティフォーラム20」と同時開催で行った。

本フォーラムでは、日本とオーストリア、スウェーデン、タイから13名の研究者や実践者に登壇いただいた。展覧会「images展」も同時開催することで、講演を聴くだけでなく、実際に作品に触れてもらい、より実感を伴って考える機会となった。展覧会には延べ約1,900名、フォーラムには延べ約800名の参加があった。

フォーラム全般を通じての成果は、障害者の芸術活動の現場でまさに今取り組んでいることが、国を越えて共有されたことだ。そのリアルな声が伝わったことは、国内の障害者の芸術活動の促進にとって、主催者も含めそこに携わる人々の機運を高めることになったであろう。

ここですべての講演をお伝えすることは叶わないが、元精神科病院で病院の歴史とそこで生まれた作品を展示するメンタルケア美術館館長マリー・リンネスティグ氏の言葉を借りたい。「精神医学の歴史を取り上げる美術館は、そのテーマの難しさと複雑さがあると思う。それでもそれに勝る魅力は、（作者も含めて）人々とのユニークな出会いなのだ。他者について学ぶことで、自分自身についても学ぶことになる。他者について語り、表現することは、同時に今生きている時代についても語ることになる」。

ある表現をアール・ブリュットと呼ぶその前に1人の作者との出会いがあり、作者のまわりには支援者や家族がいる。さらに展示までの過程には、もっと多くの人が関わっていく。このいくつもの関係性の中にアール・ブリュットが存在し、その関係性こそがアール・ブリュットの魅力だとも言える。このフォーラムをきっかけに、アール・ブリュットを福祉・美術の両方の視点で語り、さらにその先、作者個人の名で作者を語る道が増えていくことを願う。

※本事業は平成27年度地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業の助成を受けて実施した。なおフォーラムの講演内容は、報告書に掲載するとともに、NO-MAホームページでも掲載予定。

アール・ブリュット国際フォーラム
&
images展
アール・ブリュット、芸術の地平を開く

会期｜2016年2月5日（金）～2月7日（日）
会場｜大津プリンスホテル コンベンションホール淡海

フォーラムの様子［写真右］
展覧会場［写真左］

アール・ブリュットを巡る
ABColumn コラム VOL.10

鮏万里絵さんに聞く、紙の上の私の風景と日常の風景

KBS京都ラジオ
「Glow ～生きることが光になる～」
【ゲスト】鮏万里絵（写真左）
アール・ブリュット作家
【放送日時】
第111回2015年11月13日(金)21:30～21:55
第112回2015年11月20日(金)21:30～21:55

過去の放送はPodcastでお楽しみいただけます。

文：アサダワタル
「Glow」パーソナリティー

鮏万里絵（すずきまりえ）。アール・ブリュットに関心がある人であれば、一度は耳にした名前だろう。彼女の絵の特徴は、乳房、鋏、性器などのモチーフと、それらの間を埋め尽くす反復的なパターン。その世界観は、エロティック、暴力的、ユーモアなど様々に評されるが、ひとつ言えることは、彼女の作品に立ち会った人々の多くは、「好き／苦手」といった判断を通り越した地平でその渦巻く凄さを全身で受け止めざるを得ない、ということだろうか。そんな彼女が、昨年11月にグロー企画事業部総括の田端一恵さんを聞き手に、40分ほどのラジオインタビューに応えてくれた。田端さんを始め、彼女を慕う多くの人が〝万里絵さん〟と呼ぶのに合わせて、ここでもそう呼ばせていただこう。

学生時代、美術部だったという万里絵さんだが、当時は今のような作風ではなかったそうだ。現在に繋がる創作の始まりは2007年頃。10号のスケッチブックを基本に、耐水性のマーカーペンで描き込む。1枚につき創作期間は2週間～1ヶ月程。紙面全体の世界観は、彼女の頭の中に最初からあるわけではなく、はっきりとしたイメージのある部分から描き上げ、その後から他のイメージが追随してくるようだ。乳房などのモチーフの間を埋めつくすドットなどの図形的パターンも、必ずしも明確なイメージがあって然るべき箇所に描き込まれるというよりは、「このパターンにこうやって線を入れてみたらどうなるだろうか」というように、瞬時の感覚に基づき、新たなパターンが編み出されて行く、と彼女は語る。しかし、はっきりわかっていることもある。それは「昔から丸より三角が好き」ということ。万里絵さんが今でもよく覚えている、幼稚園時代のエピソードがある。「〝みんなでクッキーを作りましょう〟ってなって、みんな丸型で作ってたので、それだと焼き上がったときに誰が誰のかわからないなと思って、私は三角にしてみたんです。でも先生に〝それじゃ駄目でしょ〟って怒られて」。彼女はこの話を通じて、その当時からなんとなく生きづらさを感じていたことを改めて語ってくれた。

万里絵さんの自身の作品に対する捉え方はとても興味深い。彼女は「1点1点に〝思い入れ〟ならぬ〝思い出〟があります」と語る。例えば、それはこの絵を描いているときにこの人が訪ねて来たとか、この絵をあの人の家に居るときに描いたとか、そんな些細な日常風景だ。昨年の創作のなかで、様々な記憶がぎっしり詰まった作品があると言う。「ある作品を描いているときに代島さん（映画監督）が撮影に来られたり、母が剪定中に脚立から落ちて大怪我をしてしまったり。母の入院中、ずっとその絵が描き終わらなかったり。だから、その作品にはその分の思い出がたくさん詰まってますね」。

万里絵さんの作品の魅力はそのタイトルにもある。とりわけ聞き手の田端さんが興味を持った作品が《続く 半覚醒の低空飛行》（写真参照）だ。「描き終わってから、このような世界を低く低く飛んでいる夢を小さい頃に見たことがあることを思い出して。明け方、目を開けるといつもの自分の家の天井だったけど、また目を閉じるとその夢の続きが見れた。そんなことが一度だけあったんです」。

インタビューの最後に、彼女は普段の生活のなかで絵を描く時間があってよかったということ、そのことでなんとなく救われているような気がすることを、語ってくれた。幼稚園時代の三角のエピソードが象徴する生きづらさを和らげる行為としての意味を確認しつつも、もちろんその意味だけに収まりきらない彼女の創作に向かう態度は、これからも時に言葉にされ、時に言葉にしきれない鮮度を保ちながら、多くの人を魅了し続けることだろう。

鮏万里絵《続く 半覚醒の低空飛行》

あのひとのスタイル
近江八幡

地域インタビュー
omi-hachiman local interview

地域に愛される青果店のご夫婦、NO-MAを見つめる

—町角に弾む“アール・ブリュット論”

京六
川村 嘉男さん・志奈子さん

文：山田 創（自立生活支援員）

「もっと多くの人にこの芸術を知ってもらうために優れた作品をたくさん集めていかなくてはいけない」とご主人の嘉男さんが言えば、「優れた作品という観点の一方で、様々な背景を持つ作者さんの輝ける場所を作っていくという側面も大事ですよね」と奥様の志奈子さんが返す。その後も、示唆に富んだ意見が出てくる、出てくる。「アール・ブリュットのことをどう思いますか？」気軽にそう尋ねたことがきっかけで、いつの間にか2人の議論はとても高度に展開し、思わずこちらの背筋が伸びる。川村さんご夫婦はお2人ともこれまで美術についてそれほど大きく関心を寄せることもなかったというが、今ではすっかりアール・ブリュットの論客だ。

ご夫婦が経営する「京六」は、NO-MAのすぐ近くにあり、月に2日のみ限定で開く青果店である。一度は店を畳んだものの、地域の人の要望に応える形で、現在でもこのように定期的にオープンすることになった。川村さんご夫婦が、NO-MAにボランティアとして関わってくださるようになったのは、2014年の展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本」からである。元々、お2人はレイカディア大学の在学中から園芸科の仲間12人とNO-MAの近くにある「奥村邸」という町屋の保存や管理に取り組まれていた。そして、その奥村邸は同展の会場となっている。これがご縁となり、今回の「アール・ブリュット☆アート☆日本3」まで皆勤賞でボランティアに参加してくださった。一方で、嘉男さん曰く、初回のボランティアの時の心境は「正直な所、アール・ブリュットの展覧会を通して、奥村邸のPRをしようと考えていた」という。ところが、作品を実際に目の当たりにしたことで関心が深まり、今では前述のようにご夫婦間で深い議論が交わされる程になった。また、特に鮏万里絵さんの作品に格別の思いがあり、嘉男さんに至っては“鮏万里絵先生”と呼ぶ惚れ込みよう。このように、地域に住む方々が、アール・ブリュット作品を愛し、そしてNO-MAを見守ってくれているということは何より心強く、感謝の気持ちでいっぱいだ。

ところで、志奈子さんはアーティストでもある。何百本もの四葉のクローバーをラミネート加工して「しおり」にし、“幸せのおすそ分け”と題して周りの人に配ったり、奥村邸で剪定した松の枝に昆虫の標本や松ぼっくりの布飾りをデコレーションしたり、なんとも興味深い。「次は私の作品が飾られているかも？ フフ」と微笑む姿が、とてもチャーミングなのであった。

▲植木に布飾りとカブトムシ。生物も無生物もそのどちらともいえない標本も絶妙に可愛くデコレートする手練の業。

「アール・ブリュット☆アート☆日本3」会場
奥村邸にて鮏万里絵先生や他のスタッフと

野間の間 noma-noma vol.20
2016年3月 発行：社会福祉法人 グロー 企画事業部 TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228 編集長：はたよしこ デザイン：タケコマイ(take-co-mai)

NO-MAの新メディア

<NO-MA新グッズのご案内>

新グッズ
ポストカード、トートバッグ、
クリアファイル、一筆箋

新しいグッズの販売がスタートしました。企画展出展作品のポストカードや、アール・ブリュットの作品図版を用いた一筆箋など、NO-MAの店頭やホームページからお買い求めいただけます。

ポストカード　150円

トートバッグ　1,000円

クリアファイル　380円

一筆箋　380円

<ラジオ番組のご案内>

アール・ブリュットなど、「福祉」から生まれる様々な表現の可能性について考えるトークラジオ。

Glow ～生きることが光になる～

放送日時：毎週金曜日 21:30−21:55
周 波 数：1143-1485kHz AM, KBS京都Radio

2016年4月に番組リニューアル！アール・ブリュットを交えながらも、より広く「福祉」から生まれる様々な表現を紹介してゆきます。パーソナリティーは文筆家・音楽家のアサダワタルさん、現地リポートは社会福祉法人グローの田端一恵が引き続き担当。放送エリア外にお住まいの方もぜひPodcastからお聴きください。

（音声は放送後の翌月曜日、祝日の場合は火曜日に更新します）

【編集長はつぶやく】

はたよしこ
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA アートディレクター

以前、著名な医学博士にお尋ねしたことがある。「人は『表現』をしなくても生物として存在できない訳では無いのにもかかわらず、こうして表現の衝動にかられる。何故なのでしょうか？」と。その人は大学の教授でもある。彼は明快にこう答えてくれた。「身体は見えるけれど、心は見えないからです。見えない『こころ』を、何らかの形で見える様にしたいというのが表現活動の源泉にあるエネルギーなのです」と。その平易な答えは、妙に私の腹に落ちた。

確かに誰もが様々な形で自己の内面を表現しているが、多くの人々は多種多様な表現手段を持ち、それらを駆使できる。その点障害のある彼ら彼女らは、ある意味で限界の中にいる。彼ら自身が「限界」を意識しているか否かは分からないが、彼らの表現が強いインパクトを持つのは、まず第一に、その限界の中で最大限の力を絞り出すように発動しているからなのでは無いか。私自身も含めて多くの人々は、今や途方も無い自由の中に居て、何でもできそうだが、実際は何をしてよいのか分からない。それに比べて、彼らの表現態度は「これしか無い」というように、腰が座っている。

そして、二つ目には「彼らは何故このように世界を見、こんな形に表すのだろう」という謎である。常に次なる新しさを求めながら、一般の美術は変遷を繰り返してきたが、そうした美術史とは全く無縁な場所に居ながら、彼らは驚くほどの斬新さと示唆に富んだ表現をする。

それはその表現者個人が持つ独自の知恵と、そして生来の感覚によっている。

私には、このことが何よりも信頼できるのだ。

イベントレポート

ingスーパーリサイタル!! ～僕らの終わらないステージ。でも（内容は）気分によって変わります～

昨年11月から今年の2月にかけて、滋賀県内28カ所の福祉施設と2つの特別支援学校、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAが実行委員会を組織し、企画・展示を行う「第12回滋賀県施設合同企画展 ing…障害のある人の進行形」を開催した。本展は、厚生労働省の補助を受けて実施したものである。さらに、会期中の2月13日には関連イベントとして、「ingスーパーリサイタル！！～僕らの終わらないステージ。でも（内容は）気分によって変わります～」と題し、本展出展者や、県内で表現活動に取り組む障害のある方が出演するコンサートを開催し、46名と多くの方に参加いただいた。ここではその日の様子をレポートする。

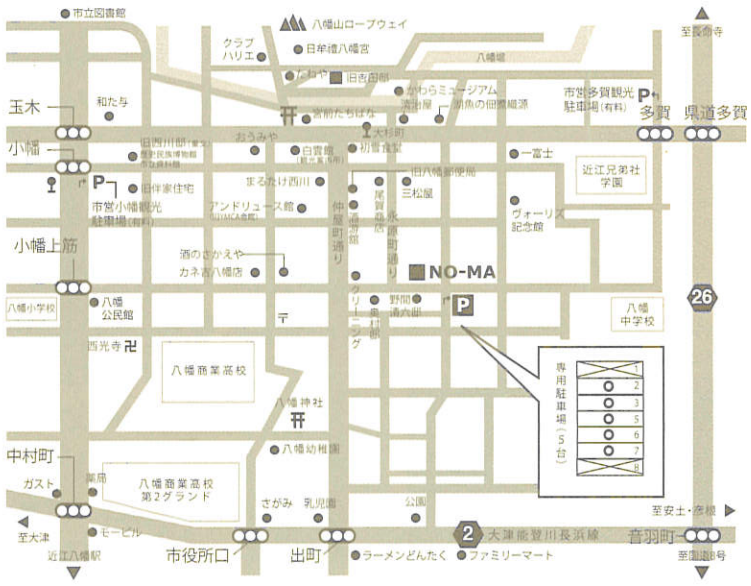
イベント進行は出展者のK・K氏、副実行委員長の髭真歩氏、アドバイザーの中野裕介氏が務め、K・K氏の挨拶と共にスタートした。第1部はユメコ・パデセント氏（その正体は出展者の田中佑芽氏だ）による自身が作詞作曲した「数えろ！お金様」、「化粧仮面」、「シャイニークレイジー」の熱唱。続く田所友香理氏による太鼓独奏は、叩くことの楽しさがありありと伝わるような熱演で、会場も共鳴しごくごく自然と手拍子が起こった。その後、戦国武将が大好きな出展者S・A（別名：院町王仁人）氏が自身で制作された甲冑を装着している様子や武友義樹氏が自作の紐を巧みに振り自在に操るといった、日頃行っている表現の様子が上映された。続いて、のど自慢のコーナーに移行し、松村一男氏と前河増蔵氏による「出世船」と「同期の桜」が披露された。松村氏の後ろではご兄弟と支援員がお手製の大漁旗を振り、前河氏も手作りの桜の木や桜吹雪で自らのステージを演出した。

第2部では、湖南ワークショップグループのダンスに他の出演者が飛び入り参加。まるで事前に打合せをされたかのように息がぴったりであり、それぞれの個性が発揮されたパフォーマンスとなった。最後はK・K氏による独唱である。急遽予定外の「お馬の親子」が加わり、「春よ来い」「365歩のマーチ」の3曲が歌われ、「365歩のマーチ」の2番からは参加者も参加して大合唱するなど、熱狂のうちに幕を閉じた。

リサイタル後には、出演者と参加者によるアフタートークが行われ、出演者やそのご家族の方などと各々の「思い」を共有した。県外から参加された障害のある子を持つ親御さんからの「わが子が春から滋賀県の施設に通うため、このようなパフォーマンスの活動にも関わりたいと思った」といった声や、県内の福祉施設支援員から「見ている方も出演されている方も皆が笑顔だった、演出も今まで見たことがない内容で良かった」との感想が語られた。

文：片山 祥子（NO-MAスタッフ）

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
Borderless Art Museum NO-MA
滋賀県近江八幡市永原町上16
TEL/FAX 0748-36-5018
休館日：月曜日
（月曜日が祝祭日の場合は翌日休館）
E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp
www.no-ma.jp
運営：社会福祉法人 グロー
～生きることが光になる～



バス　JR近江八幡駅から近江鉄道バス（長命寺行き）大杉町バス停下車　徒歩10分
車　名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。（計30分）